

第4回 ICTA国際会議

(東大宇航研) 神戸 博太郎

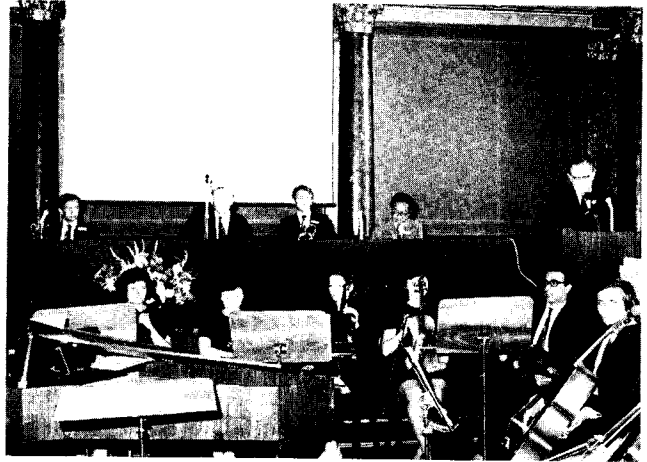
ICTA(国際熱分析連合)の主な行事である表記国際会議が去る7月8日~13日、ハンガリーのブダペストで開かれた。1965年にスコットランドのアバジーンで第1回を開いてから、3年毎にアメリカ・マサチューセッツ州のウースター、スイスのダボースにつづいて第4回である。

組織委員長のハンガリー工科大学分析教室のフェレンツ・パウリック博士によれば、登録者が外国人420名、ハンガリー人150名、同伴家族80名計650名の参加者があった。発表講演は310件である。初めて東欧で開かれたためか、外国人の数はポーランド60名、西独40名、ソ連40名、東独30名、チェコスロバキヤ30名の順であった。わが国からは私他に、お茶の水女子大中西正城教授、東京工業大学谷口雅男教授、京都大学工学部森山徐一郎教授が参加し、別に島津製作所ジョッセルドルフ駐在員の佐藤氏が同社の発表を代読した。

科学プログラムは別項に掲載されている。アブストラクトは各1頁の簡単なものだが、私の手許にある。また1年以内に論文を集めたプロシーディングズが刊行される予定であるが、講演の内容に興味のある方は直接著者にプレプリントを請求されたい。

今回の会議はハンガリー化学会の分析部会の手で組織された。部会長のE.Pungor教授は、ハンガリー工科大学の一般および分析化学講座の担当教授で、前任者でハンガリーの熱分析の中心人物としてDerivatographをPaulik兄弟とともに考案したL.Brdey教授が急逝した後をついだ人である。

ハンガリーは共産党が政権をもつ社会主義国であるが、長いオーストリア・ハンガリー時代の名残があり、古いヨーロッパの伝統をうけついでいる。私は5年前に一度ブダペストを訪れたことがあるが、その頃と比べると経済状態が見ちがえるほどよくなつており、地下鉄、ビル、橋などいたるところに建設工事が行なわれており、物価も廉く、食べ物も豊富である。5年前にはアカデミーのレセプションの時にしか見られなかったコカ・コー



開会式 右端は組織委員長F.パウリック。左へ神戸副会長、Oswald会長(チューリッヒ大学)、Pungor教授、Lombardi教授(ローマ大学)



ハンガリー工科大学 ICTA会場は左側の建物の2階、後に見えるのはガレト丘、ソ連の建てた解放碑がみえる。

ラが今では街中で誰でも飲むことができるのも、西欧との交流が進んだことを意味していよう。一説によるとハンガリーでの販売権を与える代りに、ヨーロッパ中のコカ・コーラの壘をハンガリーで製造する権利をとったという。

古風な宮殿の作りである科学アカデミーの広間で開かれた開会式で、昔のブダペスト大学に相当するエトベッシュ (Eötvös) 大学の室内オーケストラが、ヘンデルのコンチェルトグロソフ・ヘ長調と、ファルカスの18世紀のハンガリー舞曲を演奏して、会場のヨーロッパ的雰囲気を一層たかめた。学生は長髪でジーンズという世界共通の姿をしているのに、一方で学問の場をこうした古い格調で保とうとする努力がつけられているのは興味がある。

今回は、特別講演は行なわれず、Mettler Award の受賞者であるチェコスロバキヤのブラハのアカデミー固体物理研究所の J. Šesták が開会式の後で Non-Isenthalpic Kinetics について講演を行なった。彼は未だ30才を出たばかりの新進であるが、アメリカに留学したことがあり、達者な英語を話す。講演の始めに数枚のマンガをスライドで見せ、開会式に列席した“数学の判らない”人々に、自分の意図するところを印象づけたのは、仲々のやり手と思わせた。後で会ったとき、このマンガのプリントを送ってくれることを約束したが、最近届いたので、近い中に御紹介しようと思う。

会期中に開かれた ICTA の総会で、私が次期(1974/77)の President に選ばれた、前期 Vice-President であったのが、規約により昇格したわけである。これといっしょに、Vice-President にカナダの Harry G. McAdie が就任した。Secretary (G. Lombardi, イタリア) と Treasurer (R.C. Mackenzie, スコットランド) は留任である。また McAdie の後任として、Committee on Standardization の Chairman に P. D. Garn (アメリカ) が昇格した。その他の委員長は変わらない。



ロビーにて 左より、C.B. Murphy (アメリカ, Xerox 社, 前会長), M. Müller-Vonmoos (チューリッヒ, 連邦工科大学, 前組織委員長), H.G. McAdie (カナダ, オンタリオ研究所, 今期副会長), P.K. Gallagher (アメリカ, ベル研究所, Council member)

また次回(1977年)の ICTA 国際会議が日本で開かれることが決定した。日本熱測定学会が主となって、組織委員会を結成し、準備に当ることになっているが、8月第1週に京都の国際会議場で開くことはほぼまわっている。組織委員長は大阪大学の関集三教授に決定している。

ICTA については次号から3回にわたって、その活動の内容を詳しく御紹介するつもりである。今のところ日本からの入会者数が10名にみたく、日本の熱分析の研究人口からすると大へんに物足りず、他の国の人々に対して肩身が狭い。ICTA 会長として、わが国からもぜひ多数入会していただきたい。会費は年額わずか15スイスフラン(約1500円)である。

<新刊紹介>

Wesley Wm. Wendlandt 著 (John Wiley & Sons, 1974, New York)
 "Thermal Methods of Analysis" (2nd edition)

第10回熱測定討論会に来日を予定される Wendlandt 教授(プロフィール128頁参照)の名著が、10年ぶりに改訂された。旧版と比べ、頁数も2割増している。内容も温度滴定の章がなくなり、代りに純度決定、計算機化、命名法の章が新たに追加されている。目次の比較では、その他の章の記述順序に大きな変化はないように思われるが、DTA の章には DSC が追加されるなど、この10年間の熱分析の大きな進歩を反映して内容は大幅な変更がなされている。このことは、文献表を見ると一

層顕著であり、引用文献の半分以上が旧版出版以後の最近10年間のものであり、90%改訂されたと著者は述べている。この意味で、熱分析における最近10年の意味を痛感させられる改訂である。しかし、この進歩は百家争鳴によりもたらされたが、これがまだ十分整理されておらず、玉石混交の状況にあるのが、熱分析の現状のように思われる。それがこの新版にも多少反映しているように感じられるのは、筆者の欲張りすぎであろうか。

(小沢丈夫)